

十一、『田中村明細帳』から見た 江戸時代の農村の暮らし

篠栗町には近世の古文書が多く残っています。田中村(現、大字田中)の『寛政五年田中村明細帳』によって、一七九〇年代の農村の暮らしの様子をのぞいてみることにします。戸数は三四戸(農家は三一戸)で、一五二人ですので、一戸当たり四・五人弱です。水田面積は大体一九町六反、畠が二町九反で、一戸当たり水田面積は六反三畝程です。米の収量は一反歩当たり一二〇キから二二〇キの範囲で今と比べると随分低かったようです。しかも年貢を六割も納めねばなりませんでした。したがって水田が五反歩以下の百姓は年間十俵以下の米だけではとても生活は成り立ちませんでした。稲を刈った後に麦を作り、わずかな畠に穀類や野菜を作りました。

『田中村明細帳』には畠萬作として、夏大豆、大角豆が畠面積の三割、秋大豆、粟が三割、琉球芋(サツマイ)かや、麦わらなどもすべて大事に集め、肥やしにしました。当然のことですが、牛馬を飼う畜舎から出るうまや肥えは貴重な肥やしでした。

『同明細帳』によりますと馬十五頭、牛十一頭が飼われていたとあります。一疋牛か馬のいづれかを飼っていたとすれば八割ほどの家に家畜がいたことになります。これは非常に高い飼養割合です。馬は荷の運搬に、牛は田畠の耕し、資材、収穫物の運搬に活躍していました。

私は一冊の『田中村明細帳』から以上のように、江戸時代の村人の生活の姿を描いてみました。昔の人は今のようによく便利な物に満ちてはいなかったでしょうが、自然の中で生き生きと暮らしていたのではないのでしょうか。

毛)が二割、ソバが一割、大根が一割作られていたと書かれています。これらの多くは自家用として主食、味噌、醤油、副食として役立てられていたと思われます。それでも当時は商品化がかなり進んでいたもので、現金が必要でした。土建や馬を使う運搬などの人夫として、また織物、染物、紙漉き、その他種々の家内副業、薪、木炭、わら製品の販売にも力を入れていたでしょう。大変興味深いのは、同明細帳に、「耕作手すきの節、男は縄、蓆を拵へ市中に石炭を持ち出し、女も男の業を働き、或いは木綿加工致す事」という文章です。当時石炭を博多に売りに行ったことがわかります。

「田肥は市中より柴を以、肥替取尙又山草を以水田、干田(に)相用い、又は川筋を干寄あづ土を以春田作り肥し致事」とあって、柴(燃料)を博多に持って行き、し尿を稲作の肥料としていたとあります。春先には山の草を刈って田に入れ、冬の間川や沼の泥を掬い取って乾燥させ、肥やしにしました。かまどや風呂の灰、炊事の残渣、毎日のごみ、屋根替えの古い